

三人で、ひと夏を。



成人向



「おら！お前も脱げって！」

「うわっ！修ちゃんダメっ！」

不意を衝かれ、下着ごと一気に引き釣り下ろされた新澤悠斗は、為すすべも無く、ぶらぶらとチンポを晒した。

引き釣り下ろしたほうの市塚修悟は既に全裸で、川の中で、まったく平気な顔で、恥かしげも無くチンポを晒している。

「もう、悠も諦めろよ！せっかく来たのに何もしない気か？」

「でも！外で真裸なんてっ、誰かに見られたらどうするんだよ！」

悠斗は、チンポを右手で隠しながら、左手でパンツを上げようとするが、

修悟の両手はそれを許さない。

「大丈夫だって！今までだって、誰も来た事無いだろ！」

「ウソっ！去年も一昨年も、釣りやハイキングの人たちが通ったよ！」

「あれ？そうだったっけ？」

修悟は本当に覚えて無いらしく首を傾げるが、悠斗のパンツから手を離す気は無い。

「いいじゃん、チンポくらい見られたって。男がチンポ見られるぐらいでガタガタ言うなよ！」

「そんな無茶なあゝ！」

「しよがないだろ！水着を持ってくる余裕が無かったんだから！家出までして来たのに、足首を水に入れただけでおしまいだよ！」

「でも……」

「っ！もういい、このまま川の中に引き摺りこんでやるっ！」

「っわ、まった！わかった、わかったからカンベンしてっ！」

修悟が本気で、自分を服のまま川に落とすつもりなのを覚った悠斗は、即座に全面降伏した。発作的な『家出』で、まともな着替えすら無いのに、服を濡らすのは致命的に思えたのだ。

そう、彼らは一応、『家出少年』だった。それにしても、まったく悲壮感が無いのは、実は家出と言うには内容がぬる過ぎるからだろう。

幼馴染の二人は、夏休みを、学習塾の夏期講習で埋め尽くそうとする親に反発して、『プチ家出』を敢行した！

……のだが、実際は、去年まで毎年夏休みに遊びに行っていた、修悟の母方の祖父母のところに二人だけで勝手に行く、というだけなのだ。

夏休み恒例だったこの行事を、二人ともずっと楽しみにしていたのに、二人の親が申し合わせて、夏期講習のために勝手に中止してしまった。二人は当然、猛抗議をしたのだが、抵抗むなしく母親達にあっさり押し切られてしまっていた。

一度は諦めた二人だったが、本来の予定日前日の夜、どちらからとも無く、阿吽の呼吸で決行が決まったのだ。

その時点では、『家出』という自覚すらなく、田舎に向かう列車の中でようやく気がついたくらいだった。

今までは、二人の母親達と一緒に田舎の祖父母の家を訪れ、二人を祖父母に預けた母親達は、そのまま親友同士で旅行に行ってしまうのがパターンだった。

今回、初めての「二人旅」だったが、物心ついた頃から毎年通っていたので、二人に不安はまったくなかった。

列車を乗り継いで、駅から路線バスにのって祖父母の家の最寄りのバス停まで。それがいつものルートだった。

だが、二人は敢えて、列車を一つ手前の駅で下車していた。

追跡の手を逃れるために！そして、最低限の目的を達成するために。

実は、一つ手前の駅の裏手に流れる川の川沿いを、一時間ほど遡ると、目的の祖父母の家の裏に出るのだ。

つまり、交通機関を使うと、実際には大幅に遠回りになってしまふところを、ほぼ直線で突っ切る形になるためだ。

毎年、二人は祖父母の家の裏に流れるその川で水遊びをするのが恒例だった。そして、冒険と称してその上流と下流もかなり歩いていて、



その駅のことも知っていた。

実は、実際に、2年前に川沿いを下って駅にたどり着いたものの、疲れ果てて、駅員に祖父母に電話してもらって助けを求めるといふ騒ぎを起こしていた。

もちろん、二人とも、2年前とは体力が大きく違うので、まったく問題は無いはずだ。どのみち、このこ真つ直ぐ祖父母の家にいけば、既に母親達から手が回っている可能性が高い。そうなれば、まったく遊ぶ間もなく、直ぐに強制送還だろう。ならば、その前(祖父母の家につく前)に遊べるだけ遊べばいい!

二人はそう考えていたのだ。

そして、極めて順調に、お気に入り川遊びスポットに到着した二人は、そこで初めて、水着を忘れてきた事に気がついたのだった。

「それっ!」

「ばしやあつ!と大きな水飛沫が修悟を襲う!

「やったなあ!」

最初は全裸を恥ずかしがっていた悠斗も、川に入ってしまうえば、直ぐに気にしなくなっていた。

「…やっぱり、コンビニ弁当じゃイマイチ気分が出ないな」

「だね。でも、今回はしょうがないね」

おもいつきり川遊びを満喫した二人は、体が乾くのを待ちながら、全裸のまま河原の岩に腰掛けて、弁当を広げた。

ここまでは、まさに計画どおりの展開だった。水着を用意できなかったことも、結局はたいした問題では無かった。

通りかかった釣り客に、二人ともチンポを見られたけれども。

「メシ喰ったら、次はアレだな!」

「うん。いよいよだね!」

二人には、今回、おそらくはたった一日で終わってしまうこの「冒険」で、どうしても実現しなかったことが二つあった。一つはお気に入りの場所での川遊び。もう一つは、「おぼけ屋敷探検」だ。

『おぼけ屋敷』とは、二人が毎年川遊びをしているお気に入りの河原から見える、山の中腹にある木造の建物の中で、森の木々に大部分を隠されてその建物は、直線距離にすれば河原から百メートルも離れていないのだが、河原からではそこにいく道が無く、いままではただ眺めているだけだった。

ところが、去年の夏休みに偶然、すこしはなれた所に道を見つけたのだ! その時は、まさに親元に帰る直前だったため、『来年こそ、長年の疑問を解決しよう!』となつたのだった。

もう長年手入れをしていないのが明らか、崩れ掛けの石段を登りきると、『おぼけ屋敷』の裏手に出たようだった。

しかし、間近で見ると、想像していたような『廃墟のような屋敷』とはかなり趣が違っていた。

「あれえ…、やっぱり、まだ使ってる建物なんじゃないの?」

「うん…。でもソレにしちや人氣が無すぎだぜ?」

「でも、これって絶対、掃除してあるよ?」

「…まあ、どっちみち、調べて見れば判るって!」

「いや、それじゃマズいんじや…」

板張りの廊下は、古いが一応は綺麗に磨かれているように見えた。

「とりあえず、あの部屋を見て見ようぜ!」

「えっ、でもっ」

悠斗の懸念を振り払うように、修悟は一番近くにある板戸を指差す。

「開けるぜっ!」

小声でそう言うと、修悟は大きな板戸に手をかけた。



「えっ?…」

修悟が一気に板戸を開けると、二人の目に飛び込んできたのは、全裸の少年だった。○学生くらいだろうか、自分達とは比べ物にならないくらい鍛えられた体を、文字通り全て晒していた。

股間には、やはり自分達よりはずっとオトナなチンポを隠さずに丸出しにしていて、…いや、隠せないのだ。

少年は、両手両足を縛られて、大の字に吊るされている!

「おう!こりや、飛んで火にいる夏の虫ってやつだな!」

「うわっ!」

修悟と悠斗は、自分達のすぐ傍の頭上から降ってきた声に、文字通り飛び上がった。目に飛び込んできた光景に気をとられて、板戸を入ってすぐの所に人が居たのに気がつかなかったのだ。

「んっ?アキラはどうした?」

「ああ、買出しじやないっすか?買い忘れがあるって、青くなってきましたから」

「ったく、あいかわらず抜けた奴だぜ!」

事態が飲み込めない修悟と悠斗が目を白黒させる前で、揃いの黒いジャージを着た大人の男たちが、のんびり会話している。良く見ると、天窓しかない室内には、他にも3人同じ格好の男たちがいた。

「…あ、あの、これって…」

「うん?ああ」

修悟が意を決して声をかけると、最初のジャージの男は、ニヤリと笑って言い放った。

「明日には、全身がボロボロになっちまうからな。今のうちにジャケット写真撮ってるのさ!コイツが終わったら、お前達も撮ってやるからな。もうちょっと待ってる」

「え…っ」

『お前達も』っ?ごく自然に出たとしてもない話に、二人が声も無く驚愕していると、パツと室内に光が充満する。カメラフラッシュだ。

「ばかやろう!フラッシュは焚くなって言っただろう!」

「おっす!すいません!」

奥の方にいた男の一人が、腹の底に響くような強烈な怒声をカメラを持った男に浴びせる。修悟と悠斗は、また小さく飛び上がった。

しかも、見るとその男は、白く光る大きな刃物を剥きだしで持っていた。テレビで親が見ていたヤクザ映画に出てきた、『ドス』だ。

…ヤクザっ!

修悟と悠斗の二人の脳裏に、同時に同じ単語が浮かんだ。

そして、その単語の意味を理解して恐怖に震え上がっている二人の目の前で、カメラを持った男が全裸で吊るされた少年をひたすら撮影し続けている。

「…加賀丈太郎…」

悠斗は、天窓からの日差しで照らし出された全裸の少年の背後の壁に大きく書かれた文字によりやく気がついて、おもわず声に出す。その壁には、

新入荷!

加賀丈太郎

処刑方法無制限

と、書かれていた。修悟も悠斗の声で気がついたようだ。

『…っそんな…』

実際、二人はいまだに、自分達がおかれている状況がわからなかった。ただ、凶器を持ったヤクザの言葉と、縄で両手足を縛られている加賀という男子○学生の存在、そしてこの少年の人権を否定するこの壁の文字という状況には、実は思いあたる事があった。



処刑方法無制限

大塚文太郎

新人荷!

夏休みに入っただけの頃、テレビのワイドショーを賑わせていた事件。しかし、家出した女子○学生数人が、若い暴力団員に監禁されて、S Mビデオに出演させられていたという話だった…。

でも、加賀という少年も、自分達も、間違いない男なのにつ…？

「おら、もうすぐお客が来るからな！しつかり頼むぜ！」

「…はい…」

修悟と悠斗は、加賀という○学生と共に、『おばけ屋敷』の庭にいた。

実際は、『おばけ屋敷』などでは無く、数年前に廃業した民宿だということとは、「ヤクザのお兄さん」に聞かされた。（おじさんと言ったらものすごく怒られたのだ）

二人は、実際に男子○学生を性的に暴行しているその極悪なヤクザ達に言われるままに、全裸の写真を撮られてしまっていた。

加賀のように、縄で吊るされたりはしなかったが、自分で書いた名札を持たされて、様々な角度から撮られたのだ。

「修ちゃん…」

「悠…」

泣きそうな顔で囁く悠斗に、修悟は気丈な表情で応えるが、湧き上がる不安感は隠しようがなかった。

「…大丈夫だ。奴らも、まだガキのお前達に本当に危ない事はしねえ。それでも、かなり辛いだろうが、一晩の我慢だぜ」

「つえ…」

それまでずっと無口だった加賀が、小声で二人に話しかけてきた。

彼自身は、既に全裸で荒縄で吊るされるという虐待を受けていて、手首についた縄のあとも痛々しいのだが、涙はおろか、泣き言一つ言わずに、毅然とした表情をまったく変えていなかった。

「…でも、お客つて…」

悠斗が不安を増幅させている原因を素直に吐露する。裸の写真を撮られただけでも不安で胸がいつぱいなのに、さらに不特定多数の他人の前で…。ヤクザの男に言われた『メニュー』と、持たされたバックの中身を思い出して、ぐっと唇を噛んだ。

「…『客』の連中は、基本的に見るだけ、そして撮影するだけだ。そして今日のことバレルれば自分達のほうがヤバイ事をちゃんと解ってる奴らだ。馬鹿みたいに写真やビデオを撮るだろうが、それで将来お前達が困ることはねえよ」

「本当に？」

「ああ。大丈夫だ」

加賀の言葉にはなんの根拠も無いはずなのに、修悟と悠斗は、何故か信じられる気がした。

「あの」

今度は修悟が何かを聞こうと口を開くのと同時に、エンジン音とブレーキ音が響き渡った。

庭からでは建物の陰になって見えない玄関のほうからだ。『お客』を乗せてくるといふマイクロバスに違いなかった。

「みなさん、お疲れさんでしたっ！こちらへどうぞ！」

他のヤクザと同じように、黒のジャージを着た若い男が、ぞろぞろと大勢の人間を引き連れて庭に入ってきた。

全部でちょうど二十人。服装も年恰好もバラバラな男たちだが、皆一様に複数のカメラを持っている。

「さあ、この三人が、本日の生費です！」

引率の男が修悟たち三人を紹介すると、感嘆のどよめきとともに、さつそく数多くのシャッターが切られた。



山の木々に囲まれたその庭は、敷地としては学校のプールくらいはありそうだが、生い茂る庭木が勢力を広げていて、開けているのは縁側の前にある学校の教室くらいの広さだった。

風も無く蝉の声だけが響き渡る、真夏の陽射しに満たされたその庭は、今、不気味な熱気に包まれていた。黒いジャージ姿の人間も含め、三十人近くの間がにいるのに、誰一人として声をださずに三人の少年を取り囲んでいるのだ。

少年達は、いかにも急ごしらえな木製の台の上に立たされている。

そして、黒ジャージが、それぞれに向けてビデオカメラがセットしていき、それ以外にも、手持ちで撮影する黒ジャージもいるようだ。

「みなさん、おまたせしました！」

黒ジャージの中でも、一番若く見える茶髪の男が場違いに陽気な声をあげる。基本的に、黒ジャージの男たちはみんな若く、おそらく二十歳そこそこからせいぜい三十歳代前半までなのだが、この男は、下手をすればまだ未成年だろう。

「本日の司会進行を勤めさせていただく石岡っす！諸々の決まりは事前にご案内のとおりで、ようは、撮影は無制限、ナニを撮ってもらってもOkですが、お触りは、俺たち主催側が許可した場合のみとさせていただきます！」

石岡という茶髪の若者は、そう一気にまくしたけると、一呼吸おいてから、高らかに宣言した。

「それでは、これより、こいつら三人の公開処刑を開始します！」

石岡の声を合図に、客達は一成にカメラを構えた。

「おらっ！お前らナニ生意気に服なんか着てやがるんだっ！お前らにはもったいねえっ！脱げ！そんでお客さんに自己紹介しやがれ！」

石岡の怒声を受けて、加賀がまずシャツを脱ぐ。修悟と悠斗も一緒に脱がなくてはいけなのだが、カメラを構えた大勢の他人を前にして、完全に固まってしまっていた。

加賀はそんな二人を一瞥すると、自分だけは黒ジャージに言われたとおりに脱ぎ続ける。

一枚脱いだら約三十秒そのまま待ち、客が撮影する時間をつくる。そしてゆっくりとその場で一回りするのだ。

だが、いくら一枚ごととは言っても、所詮は夏服の学生服なので、あつという間に青いローライズのボクサーブリーフ一枚のみとなる。

加賀はその最後の一枚も、まったく躊躇わずに脱ぎ捨て、客のカメラの前にチンポを晒した。客のカメラの動きが一気に激しくなる。

「：加賀丈太郎、だ」

静かに、だがはつきりと通る声で、平然と自己紹介をする。

「コイツの親が洒落にならない金額の借金を踏み倒したんで、息子のコイツに責任取らせることにしたっす」

大半の客は、石岡のいかにもな説明を聞き流して全裸の加賀の撮影に忙しい。それこそ、全身くまなく撮りまくられていて、客の注文でアナルまで自ら晒させて撮影されていた。本当なら、三人そろって撮影になるはずだったのに、二人が躊躇っていたため、加賀一人が全ての引き受けた形になっている。

だが、そろそろ客の一部が修悟と悠斗に注目し始めているようだ。

「：っ、ちくしょう！」

修悟は小声で叫ぶと、自分で一気に短パンを脱ぎ捨てて、そのままブリーフも膝まで下ろしてチンポを晒し、大きな声で叫んだ。

「っ、いちづかしゅうご！」

「修ちゃんっ」

それを見た悠斗も、Tシャツを脱いで、トランクスごとハーフパンツを下ろして叫ぶ。

「っに、にいざわゆうと！です」

黒ジャージに言われていた、ゆっくりと脱ぐことも、全裸になってから自己紹介することも守れていないが、客にはウケたようだ。



「こいつらは、家出小僧っす！調子こいて悪さしたんで、キッツいお仕置きしてやることにしたっす！」

もちろん、修悟と悠斗は悪さなどしていない。だから、加賀の理由も本当かどうかは二人には判らなかつた。

それから、しばらくの間、客達は修悟と悠斗の二人を中心に、熱心に撮影をしまくつた。

「…そろそろ、いいですか？コイツ等は明日の朝、皆さんをお送りするまで真裸のままっすから、まだいくらでも撮れますから！」

石岡は、おそらく客にとっては期待以上の上玉だった少年達の裸体の撮影に、いきなり夢中になってしまった客をなだめるように言うと、あいかわらず、いまいち場違いに陽気な声で残酷な内容を告げた。

「え、そんなワケで、こいつらの人権を剥奪して、セックス奴隷として調教するっす！ヨロシク！」

悠斗が、石岡に命令されて縁側に広げたモノを見て、客達はどよめいた。

黒ジャージに持たされていたスポーツバックの中身だ。

巨大なガラス製の注射器のようなものが三本、黒い皮製の首輪とリードが三セット。…『注射器』はもちろん浣腸器だ。

「苦手な方はスンマセン！コレを使うと、イロイロ上手くいくんで。腹の中をキレイにするのと同時に、コイツ等のちんけなプライドもキレイさっぱり洗い流して、ただの肉奴隷だって自覚させてやれます」

石岡は浣腸器を一本手にとって掲げると、こやかに言つてのけ、少年三人を縁側の前に立たせて、尻を客に向けさせた。

「まずは、〇坊のくせに妙に生意気なコイツからぶち込んでやります」

そう言つて加賀の尻をパンと叩くと、石岡はバケツから浣腸器いっぱい透明な液体を吸い上げた。

「おら！ぶち込んでやるから、自分でケツの穴広げて差し出せ！」

加賀は躊躇うこともなく、言われたとおりに、自分で尻を広げてアナルを石岡に差し出す。

「っ！んっ！」

差し出された加賀のアナルに浣腸器を挿しこむと、石岡は、たっぷり時間をかけて満杯だった液体を全て注入してしまつた。

「…っ」

さすがに苦悶の表情を浮かべる加賀をそのまま放置し、石岡は修悟と悠斗の尻にも情け容赦なく浣腸器を挿しこみ、液体を注入する。液体の量は加賀の半分以下だったが、初体験の二人には過酷だった。

「ぐあああっ！」

「っ、駄目、もうダメっ！」

修悟と悠斗のふたりは、注入された直後から悲鳴をあげてしゃがみこんでしまう。加賀は気丈に立っていたが、脂汗を流して歯を食いしばっていた。

そんな三人に、他の黒ジャージ達がそれぞれスコップを手渡した。

「出したけりや、自分でトイレを作りな！」

石岡はそう言つて、庭の奥の地面を指差す。

「オレが見て、OKっていう深さまで掘らないとダメだぜ。あと勝手に出したら、二倍の量でもう一度浣腸して腹をたこ殴りだからな！」

「っ、ちくしょうっ、ダメだっ」

「っ！っ！」

修悟は、悔しそうに吐き捨てると、スコップを手にしたまましゃがみ込み、悠斗は声も無く崩れ落ちた。

石岡に、自分で便所穴を掘れと言われて黒ジャージに抱えられるようにして庭の奥にたどり着いたものの、耕してあるわけでもない地面は想像以上に硬く、腹にまったく力が入らない二人は、地面にスコップの先を挿す事すら出来なかつた。



体力の差か、加賀はなんとか、すぐにある程度の穴を掘ったが、そんな二人を見て、二人の前にそれぞれ穴を掘り始めた。

「っえ？」

自分自身も青い顔で大量の脂汗を流しているのに、自分の穴を後回しにして、修悟たち二人を助けようというのだ。

そんな様子を含めて、三人の痴態をカメラに収めようと、結局は全ての客が三人を取り囲んでいる。

「…まあ、手伝ったらダメとは言わなかったからな。いいぜ、二人はOKだ。派手にぶちまけな！」

「っ！！」

石岡の許可が出ると、修悟と悠斗は夢中で穴にしゃがみこんだ。

その瞬間は、二十人以上の視線やカメラに囲まれていることは、頭から完全にけし飛んでいた。

しかし、全てを出し切ってほっと息をついた瞬間、二人の目に、自分達に向けられている大勢の人間の目とカメラのレンズが飛び込んできて一気に全身の血の気が引き、次の瞬間には全身に火が付いたような羞恥に襲われた。そして、自分の中で何かがガラガラと壊れていく感覚に震えた。

「約束だからな。覚悟しろ」

茫然自失としている修悟と悠斗の前で、加賀が再び石岡にアナルを差し出していた。石岡の手にはやはり浣腸器がある。

二人を助けた加賀は、結局、自分自身の穴を掘り終える余力は無く、修悟たちとほぼ同時に、掘りかけの穴でぶちまけてしまったのだ。

「…そんな…」

自分達のせいで加賀が再び酷い目にあうことが、ようやく理解できた悠斗は、絶望的な呟きを漏らして絶句し、同じく事情を察した修悟も唇を噛んで天を仰いだ。

それでも、どうすることも出来ない二人の目の前で、加賀はさっきの二倍、丸々、浣腸器二本分の液体を注入されていた。

「っんがああっ！」

それまで、ずっと寡黙に耐えてきていた加賀が、たまらず絶叫する。

頭の後ろで両手を組んで、大また開きで庭の真ん中に立たされた加賀は、大量の浣腸液で膨れた下腹を、石岡に平手でめった打ちにされているのだ。

「…七つ、八つ、九つ、…それ最後だ、十っ！」

最後の「十」の掛け声とともに、一番強く「パーン」と加賀の腹を打つ音が響き渡り、次の瞬間、破裂音とともに、加賀のアナルから透明な液体が大量に吹きだした。

「…っ」

自分達のせいで加賀が受ける壮絶な仕打ちを見ながら、二人は、ようやく自分達の置かれた立場を思い知っていた。

正直な話、今までは、心のどこかでまだこの事態を甘く見ていたのだ。彼らには、あまりに非現実的でリアリティが無かったから…。

「おら、お似合いだぜ！」

「…っ」

修悟は、石岡に、犬のように黒い皮製の首輪とリードを付けられた。

後ろで押さえつけられて跪かされてはいるが、既に抵抗する気力は完全に失われている。隣では、同じように首輪とリードを付けられた悠斗が力なくうな垂れていて、さらにその隣では、やはり首輪とリードをつけられた加賀が、じっと中空を睨んでいた。



「さあ、勝つのはどっちだ！負けて、かわいい尻を真っ赤に腫らすのはどっちだ！」

修悟と悠斗は、いわゆるシックスナインの体勢でお互いのペニスを口に銜えこみ、拙いながらも、舌を使って必死に愛撫をしている。

この勝負は、『先に射精したほうが勝ち』なのだ。そして、負けた方は全員の前で、尻を十発、全力で叩かれることになっている。

二人は、お互い、相手を勝たそうと必死だった。

石岡の妙に陽気でノリの軽い煽りとは関係なく、『宴会の余興』は盛り上がっていた。

三人の少年を庭で肉奴隷に貶めてから、少し時間をおいて午後六時から『おぼけ屋敷』こと元民宿の大広間で始まった宴会は、実は最初はごく普通の宿の温泉宿のような宴会だった。厨房にもちゃんと板前を入れたのか、出されているお膳の料理は温泉宿で出されるような本格的なもので、普通と違うのは、配膳したのが仲居さんではなく、黒ジャージの男達だった、ということくらいだ。

客達もはじめは驚いたようだが、すぐに、お互い名を隠した者同士ではあるが、談笑なども始まり、本当にただの温泉宿の宴会になった。

だがもちろん、それで終わらなわけは無く、開始後約四十分、客達の膳が進んだ頃を見計らうように、全裸に首輪だけの少年三人が登場したのだ。

はじめは、三人それぞれが、二十人の客全員に酌をしてまわった。

そもそも『お酌』という行為を解ってなかった小学生二人は、見よう見まねで、真似事ではなかったが、客としてもそんな事はどうでも良かった。

一通り『酌』という名目の全裸引き回しが終わると、いよいよ本格的な

『余興』が開始となり、オナニーショウによる公開射精を手始めに、三人の少年達は、様々な性的痴態を披露させられた。

修悟と悠斗は、公開洗腸で立場を思い知らされ、また、自分達が不始末をすると加賀がその尻拭いをする形になってしまいうことにも気がついて、彼らなりに真剣に、言われた行為を実行し続けた。

人前での射精も、アナルに異物を入れられるのも、他人のチンポをしゃぶるのも、当然、全て生まれて初めてだったが、もう、ほとんど躊躇わずに果敢に挑戦していった。

あくまで余興であるため、ハードなプレイはまったく無かったが、何も知らない○学生の男の子達が、彼らなりの拙い仕草で、一生懸命に性的痴態を演じる姿は、本人達が思っている以上に客を喜ばせた。

また、○学生の加賀のほうは、不慣れな様子は○学生達と同じだが、二人よりはかなりキツイ行為を要求され続けたにもかかわらず、潔く、思い切りの良い態度が好評だった。

そして、客の熱気が最高潮に達した頃、ようやく『余興のメインイベント』が始まった。それまでは、いわば黒ジャージの側が演出したショーを見せるだけだったが、ここからは客が余興の演目の選択に関わることになる。

実は、事前に客達には『応募用紙』が配られていて、『チップの金額』を記入して主催側に提出させていた。その金額の上位六人が、実際の現金と引き換えに、主催があらかじめ示していたメニューの中から、少年達にやらせたい行為を選択する権利を得るので。

また、基本的には、客達に、『少年達の肉体で直接、遊ばせる』という趣旨であるため、どのメニューを選んでも、必ず客が少年の体を弄ぶ場面が用意してあった。

この『シックスナインフェラ合戦』では、落札した客が、負けた少年の尻を全力で叩くことができるのだ。



「よし！」

フェラ合戦に見事に『負けた』悠斗が小さくガッツポーズをする。

「悠、お前っ…」

修悟の精液を飲み込みながら嬉しそうに笑う悠斗の笑顔を、『勝った』修悟は泣きそうな顔で見つめた。

「ひああっ…」

パーンと思った以上に大きい音と同時に悠斗の悲鳴が大広間に響き渡る。

すでに八発目。それこそ『親にもぶたれたことが無い』悠斗の尻は、綺麗に真っ赤になっている。

悠斗は、涙目でもいきり悲鳴をあげているが、それを見ている修悟のほうにボロボロと大泣きしていた。

「はあああんっ！」

「うううんっあ！」

修悟と悠斗の二回戦は、『チンポ相撲木馬場所』だった。

悪趣味で馬鹿っぽい名前ではあったが、実際にやらされる身にとっては、冗談では済まされなかった。

傾斜のついた三角木馬を二つ合わせたものの頂点に滑車を取り付け、両側に跨がせた二人のペニスを結んだ紐をその滑車に通し、そして、跨がされた二人の股間には、たっぷりと油が塗られているのだ。

こうなると乗せられた二人は、木馬に股間を苛まれる苦痛と、ローターで強制的に勃起させたペニスを紐で苛まれる苦痛、さらには、油で滑ってずり落ちる体を必死で支え、持ち上げる太ももへの過負荷という三重苦に苦しめられるのだ。

勝敗は、五分間の制限時間終了時点で、亀頭が滑車からより『遠い』

ほうが勝ちで、三回やって負け数の多いほうが、やはり尻を十発、全力で叩かれるのだ。

客の特典としては、尻叩きの他に、少年達の股間に直接油を塗ることや、アナルへのローターの挿入も客の権利だった。

「今回は圧勝でした！三勝零敗で悠斗の勝ち！」

「よっし！」

今度は、『完敗』した修悟がガッツポーズをする。

この勝負は、結局は太ももの筋力と持久力の勝負だったため、運動全般が得意で、自称『脳みそ筋肉』の修悟が、運動音痴で、同じく自称『頭脳労働派』の悠斗を圧倒したのだ。

「修ちゃんっ…」

今度は、悠斗がボロボロ泣く番だった。

「えー、では引き続き、修悟と悠斗を『使った』の余興を行います。本日最高額を入札された『とらとら』様、『演目』をご指定ください」

本来は、加賀と、二人セットにされている修悟と悠斗の二人とが、交互に三回『余興』をやることになっていたのだが、木馬を準備する都合で、加賀が二回目、三回目を連続してやっていた。そのため、今度は修悟と悠斗が連続して行うのだ。

「…あ、はい、ども！えくと、ご指定は、『納涼！花火とスイカ割り』っすね、…え、あれ？」

最高額を入札したという客から、指定のメモを受け取った石岡の顔色が変わる。慌てて他の黒ジャージ達を呼びつけて、なにやら書類を確認したりし始めた。そして、その演目を聞いた悠斗の顔色も変わっていた。彼は知っていたのだ。その楽しそうな名前の正体が、実際は、

過激な率丸責めだということ。



実は、三人がやらされる可能性がる『演目』メニューは、事前に三人にも見せられていたのだ。修悟は、『漢字が多い』と言って殆ど読まなかったし、加賀も潔が良いのか触りもしなかったが、悠斗はもちろん全部読んでいた。普通の小学生である悠斗にとっては、どれもこれも想像を絶する内容だったが、特にコレについては、過酷すぎると恐怖していたものだった。

「…っ、お客さん、もうしわけありません！こちらの手違いで、コレは本当は演目から外してあるやつでした！」

暫くして、石岡が、『とらとら』という客に深々と客に頭を下げた。

石岡の説明によれば、企画準備段階で没になった案が手違いで案内書類に残ってしまったということだった。

しかし、酔った勢いもあるのだろう、客は納得せず、どんどん激昂していくばかりだった。しかも、それまでの盛り上がりがあるまま転化したかのように、他の客も騒ぎ始める。

「…っでも、さすがに、コレはこの二人には、ちよっと…その…」

石岡はあきらかに動揺してオロオロするばかりで、このままでは客に押し切られるのは時間の問題に思われた。

「…っ」

その様子を見て、悠斗は生唾を飲み込んで天を仰いだ。

修悟は、石岡や悠斗の様子を見てどんどん不安な表情になっていく。

「…お客さん、オレじゃ駄目かい？」

「つえ？」

石岡がいよいよ押し切れられそうな雰囲気になった瞬間、加賀が客と石岡の間に割って入り『とらとら』という客の顔を見て言い出した。

『とらとら』氏は、目を丸くして驚いている。

「こいつらの豆粒みたいな金玉じゃ、どっちみち、たいした事はできねーだろ。いいぜ、オレの金玉を使えよ。こいつらのよりは、はるかにいいタマのつもりだぜ」

そう言って、加賀は不敵に笑い、客達からは感嘆の声があがった。「つちよ、そんなつ！まって！」

そんな加賀に、誰よりも石岡が青くなる。

だが、勢いが付いた客達は、もう止められそうになかった。

「お待たせしました！『納涼！花火とスイカ割り』っす！」

まだ表情の硬い石岡が、言いながら大広間の奥の襖を開け放った。

次の瞬間、客達の間に静かにどよめきが沸き起こった。

暗くした和室の中央に、大開脚で宙吊りにされた加賀がいて、その股間では、勃起したペニスの尿道に着火した花火が挿し込まれて、その明かりで全身が照らし出されていた。

そして、その股間には、小玉とはいえ、スイカが丸々一個、陰囊の根元に括りつけた紐からぶら下げられ、二つの睾丸を縊り出していた。

「うそっ…」

加賀の凄惨な姿を見て、修悟は目を剥いて絶句し、悠斗は声にならない悲鳴をあげた。本当なら、自分達がこうなっていたはずなのだ…。

しかも、これで終わりでは無いのだ。

「…では、『スイカ割り』をどうぞ！」

木製の棒を持った『とらとら』氏が、勢い良く部屋に乗り込む。そして、ビリヤードのキューのように棒を持つと、スイカをトンと突く。

「っんあぁ！」

揺れたスイカが睾丸をぐいぐいと苛み、それまで歯を食いしばっていた加賀は堪らず叫んだ。

その後、『とらとら』氏は、花火十本を燃やし尽くすまでのあいだ、『スイカ割り』を楽しんだ。最後の三本では、『うっかり』加賀の睾丸を直接めった打ちにしたりもしながら…。



「若っ！」

「ジョウさん！」

黒ジャージ達が一斉に加賀に駆け寄っていく。

『納涼！花火とスイカ割り』の終了とともに宴会は終わり、見事に務め上げた加賀と、そして修悟と悠斗は、黒ジャージに抱えられるようにして、大広間からはかなり離れた和室に連れてこられ、広げられていた布団に横たえられた。

この部屋は、宴会前にも連れてこられた、いわば控え室だ。

「…え？」

「あれ…？」

だが、宴会前とは明らかに意味が違う光景を目にして、修悟と悠斗は困惑してお互いの顔を見合わせた。

宴会場の大広間に連れ出される前は、部屋には見張りの黒ジャージの男が一人いて、加賀も含めて三人で、身を寄せ合うようにして部屋の隅にいたのだが、いまは、鞆丸責めで消耗し、全身に脂汗を流しながら苦悶の表情を浮かべている加賀を、黒ジャージの男達が心配そうに取り囲んで、声をかけていた。

それだけなら、単純に、無茶をした奴隷の心配をしている、というだけなのだろうが、どう見ても、黒ジャージ達は加賀のことを親しく知っている、それも、全員が加賀に対して敬語を使っているのだ！

「若あ！すんません！オレがミスったばかりに！」

しかも、あの石岡が泣きながら土下座して謝っている！

「修ちゃん？これって…」

「なんだこりゃ…」

「…っバカヤロウっ！」

ぐੱたりと横たわったままで、息を荒げながらだが、加賀が大声で黒ジャージ達を怒鳴りつけた！

黒ジャージ達は一斉に身を硬くする。

「っ、たくっ、全部終わるまでは、オレはただの肉奴隷だって、あれだけ言っただじやねえか！それを、ちよっと段取りが狂っただけでオタオタしやがって！見る！あいつら目を剥いてあきれてるぜ！」

いきなり振られた修悟と悠斗は、それこそ目を剥いて驚いた。

「え、あ、あれ？えと？」

『皆さんはお知り合いですか？』と聞きたかった悠斗は、焦って言葉が出ない。修悟にいたっては、ただ、あんぐりと口を開けて呆けていた。

「…すまなかったな。騙すつもりじゃなかったんだ」

約一時間後、風呂上りに浴衣姿でポカリを口にしながら、ようやく落ち着いてきたらしい加賀が、苦笑いをしながら修悟と悠斗に話しかけた。

二人も、加賀と一緒に風呂に入ったが、頭の中の様々な疑問を加賀にぶつける勇氣も持てずに、ただずっと悶々としていたのだ。

同じく浴衣を与えられて、ポカリを口にしながら、二人は加賀を食い入るように見つめて次の言葉を待った。

それから、加賀が少しずつ語ったところによると、加賀自身はやはり黒ジャージの男たちの身内で、彼らは『加賀組』という古い任侠の一家だった。

ただし、そうは言っても、実際はとうの昔にヤクザとしての実態は無くなっている、今は病床にいる加賀の祖父である組長を慕って、身寄りの無い若い衆が身を寄せ合っているだけの集団だった。

「そのジジイが、とんだ『お人よし』でな。他人の借金の保証人になりまくったあげく、ほとんど全部背負い込んだ。ほんと、漫画みたいな話だよな」

この元民宿も、その関係でたまたま転がり込んできた物件で、金銭的価値は殆ど無いらしい。

「で、いよいよ家屋敷も借金のかたにとられそうになってな。そうなれば、コイツらみたいなクズ野郎達はあつという間にホームレスか犯罪者だ」

そう言って、加賀は身近に正座して控えている石岡を小突いた。

「で、たまたま、こっち方面の業界の経験者がいたんで、こういう商売を始めたわけだが……」

加賀は一呼吸いれて肩を竦めた

「最初は、『奴隷』に経験者を使ったんだが、ぶっちゃけイマイチなんで、思い切って、おまえらのようなド素人でやってみたんだ」

「……え？」

そこで石岡が口を挟んだ。

「本当は、お前らだけの予定だったんだ！でも、若が『素人二人だけじゃ本人達も不安だろうし、何かあったときに対応できない』って言って、自分も一緒にやるって聞かなくて！」

石岡は、また泣きそうな顔で口を尖らす。

「……まあ、結果的に正解だっただろ。本当は、最後の最後まで隠し通すはずだったんだけどな」

そう言って笑いながら、加賀は石岡にでこピンをする。

「っ、すみません」

ずっと黙って聞いていた修悟と悠斗は、ずっと抱えていた疑問の多くが解けるのを感じると同時に、新たに生じた重大な疑問に戸惑っていた。

だが、その疑問を加賀にぶつける前に、襖が開いて、最後の処刑が行われる時間だと黒ジャージの一人が告げる。

「おう！じゃあ、これで最後だ。お前たちも頼むぜ！」

加賀はそう言って立ち上がると、浴衣を脱いで全裸になり、自分で首輪を付けた。

午後十一時ちょうどに、客達は庭にある蔵の前に集められた。

「みなさん、お待たせしました！いよいよです」

最初の調子を取り戻した石岡が、もみ手でもしそうな勢いで客達に話かける。

「それでは、ご開帳つす！」

石岡の合図で、蔵の重い扉がゆっくりと開けられていく。

蔵の中が明らかになると、客達は息を呑んだ。

蔵の中は、月明かりが差し込んで思った以上に明るかった。

その明かりに照らし出されて、三人の裸体が浮かび上がっている。

三人ともまったく同じように、両手首と両膝で吊り上げられ、強制開脚された股間では、アナルに極太パイプを挿入され、ペニスバンドでペニスを戒められていた。

静かな蔵の中では、三人の苦しそうな息遣いと、アナルパイプの振動音のみが響き渡っている。

「コイツ等は、このあとザーメンの海で溺れ死ぬまで犯します。そうなる前に、最後にキレイな体を存分に撮ってやってください！」

石岡が言い終わる前にシャッターの雨が降り注ぐ。

「……最後には、お一人様一分だけ、お触りタイムもとりますから！」





「っはあっん、はああっ」

「っんんっは、ああんっ」

修悟と悠斗は、お互いの呼吸のタイミングが、どんどん合っていくのを感じていた。

今、悠斗のアナルに修悟のペニスが挿入され、修悟のアナルには加賀のペニスが挿入されている。そして、加賀のリードでゆっくりとピストン運動をしているのだ。

悠斗は、自分のアナルにある修悟の熱いペニスのこと頭がいつぱいになり、修悟は自分のペニスに熱く纏わりつく悠斗のアナルと、自分のアナルにある熱い加賀のペニスの事で頭がいつぱいになっていた。

「初めてのセックスは、お互いのアナルで。これが親友同士である二人のたった一つの願いでした。それ以外は、どんな目にあっても構わない、という頼もしい条件つきで」

石岡の勝手な説明も二人の耳にははいらず、ただひたすらお互いの感触を貪るのに精一杯だった。

「あ、もう出るっ！」

「ぼ、僕もっ！」

「ああいいぜ、一緒に射こう！」

あっという間に限界を迎えた二人に合わせ、加賀は腰使いを一気に加速する。

「ああああっ！」

「んんんんっ！」

「っん」

三人の動きがピタつととまり、ほぼ同時に絶頂を迎える。

こうして、二十人の客のカメラの前で、親友同士の初めてのセックス第一弾は終わった。

このあと、開きっぱなしになった悠斗のアナルと、粘液の糸をひく修悟のペニスもじっくり公開され、そして、その後すぐに、攻守を入れ替えて、親友同士のセックス第二段が開始となる。

今度は修悟のアナルに悠斗のペニスが挿入され、悠斗のアナルに加賀のペニスが挿入されていく。

『悠斗、大丈夫か？』

加賀が抱えている悠斗の耳元で囁く。

『…うん！』

修悟にくらべて、体力的に劣る悠斗は『三連尻』の体勢がキツイようだったが、そこはやはり意地があるらしい。

「っはあっん、はああっ」

「っんんっは、ああんっ」

生気にも第一弾よりは長く粘る二人に、加賀が少し意地悪をする。

「っああ！」

ピストンの角度を一気に鋭角にして、前立腺を抉ったのだ。

「ああ、出るっ」

「僕もっ！」

親友同士お互いに抜き差しした後、あらためて、加賀も含めての本格的な3Pセックスに突入していった。



「さあ、親友同士の甘い時間はおしまいつす！ここからは、ザーメンの海で溺れてもらいます！」

石岡の合図で、蔵の奥から十人の黒ジャージが現れる。

「コレが、本日のザーメン注入器つす！」

石岡自身も含め、黒ジャージ全員が客の前で脱いで全裸になった。

みんな、鍛え抜かれた屈強な肉体で、股間の『ザーメン注入器』もなかなかの一物ぞろいだ。

「全員のミルクタンクが空になるまで、やり抜きますす！」

「あああああん、おつきいっつ」

「ふっとえええっよっ！」

蔵の中の平台に、犬のように四つん這いで二人で並ばされた修悟と悠斗は、そのままバックから全裸の黒ジャージ達に犯されていた。

加賀とは違う本物の大人のペニスを、容赦なくぶち込まれているのだ。

「いった、動くなって！」

「ああんっ、きつつっい」

修悟と悠斗は口々に苦痛を訴えるが、無論止めてくれるわけは無かった。

「はあ、があ、あああん」
「んんんっ」

それでも、徐々に慣れてきたのか、三人目くらいからは、自ら呼吸をコントロールできるようになり、隣の親友の様子を伺う余裕すら出てきていた。

「悠っ！」

「んんん？」

「っキス、してみねえ？」

「っええ？」

「っイヤかっ？」

「っいいっ、よっ！でも、なんでっ？」

「…オレたちっ、こんだけっ、セックスっしてんのに、まだっ、してないっ、じゃんっ！」

「っああっ、そうっだねっ！」

「でもっ、僕でっいいのっ？」

「この際っ、お前でっいいやっ！」

「…っ！やっばっ、しないっ！」

「っうそっ、ごめんっ！」

「…っ、しよっ！」

「っんっ！」

「っんぶっ」

…親友とのファーストキスは、ザーメンの味がした。



両足を鉄棒で開脚のまま固定された加賀は、黒ジャージ達の中でも一番巨根な男のペニスをアナルいっぱいに咥え込んだまま、常に三本のペニスに同時に責め立てられ続けていた。

「おらあつ！」

「つんんんっ！」

一本は、切れ間なく口を犯し、あと二本は両手で手淫を強制され、さらに、加賀のペニスも、延々としごかれ続けているのだ。

加賀自身が、その年齢を考えれば相当鍛えられた肉体ではあるが、純粹な体格という意味では、やはり成人男性とは比べるべくもなく、さらにはそれが加賀と同等以上に鍛え上げられているのだ。

そんな屈強な男たちが絶え間なく、常に四人以上で加賀を陵辱し続けている姿は、まさに壮絶としか言いようが無いものだった。

観客たちは、まるで、四人の男たちが加賀を貪り殺そうとでもしているような、そして加賀は命がけでそれと戦っているかのような錯覚を覚えるほどだった。

「んっんあああつ！」

男の大きな手で扱き立てられ、巨根で前立腺を激しく抉られている加賀は、もうすでに幾度目かの、強制的で苦痛でしかない射精をした。

黒ジャージ達は、修悟と悠斗、そして加賀を、全員で満遍なく犯すべく、精力的に活動した。

そして、石岡が口上で述べたごとく、蔵のなかをザーメンの海にせんばかりの勢いで自ら射精し、また三人にも射精を強要し続けた。

客たちは、期待を遥かに上回る筋肉と汗と精液の狂乱に、撮影を忘れて見入ってしまう者も多かった。

「やっぱ、まだ足りねえっす！」

石岡は、修悟を犯しながら、大きな声で、客にむかって言った。そして、石岡の声を合図に、黒ジャージ達の動きが大きく変わる。

「つんあああん？」

「はああんっ！」

修悟と悠斗は、いきなり黒ジャージにアナルを犯されたまま、くるっとひっくり返されてしまった。

加賀も、やはり犯されたまま、さらに大きく体を開かされている。

「解禁するっす！お客さんも、こいつらに、思いっきりぶっ掛けてやってください！入れたり飲ませたりはNGだけど、それ以外は無制限でやっちゃってください！」

まさに延々とお預けを喰らっていた二十人の獣が、一斉に参戦する。

今度こそ、本当にザーメンの海に沈むことになりそうだった。



「…なんだって？どういうことだ！」

自分達三人と、黒ジャージ、そして客達の合わせて三十人以上のザーメンの海の中で、全てが終わった後のどろりとした虚脱感を、突然、加賀の緊迫した声が切り裂いた。

客達を自室に帰して本当に全てが終わり、ザーメンの海の中でまどろんでいた加賀に、控え番だった組員が蔵に飛び込んできて携帯を手渡したのだ。加賀の聲に驚いて覚醒した修悟と悠斗の目の前で、携帯に向かって問い詰める加賀の顔色がどんどん青くなっていく。

『人の顔の色って本当に変わるんだ〜！』
のんきにそんな感想を思った二人を、携帯で話している加賀はずっと見つめ続けていた。

「…わかった。そっちは任せる」

携帯を閉じると、加賀は唇を噛んで中空の一点を睨みつけた。

「若？どうかしたんすか？」

メインスタッフとしてフル稼働し、同じくザーメンの海でまどろんでいた石岡が、不安げに加賀に声を掛ける。

「…アキラからだ」

「アキラ？そういうえば、アイツどうしたんすか？この二人を連れてきてから姿が見えないっすよね？てつきり買出しの追加に行ったんだとばかり思っていましたか？」

「…その、約束してた二人ともども、病院だとさ」

「…は？」

「派手にお釜掘られたんだそうだ。幸い結果的には三人とも軽症だけど、精密検査とかでいままで拘束されてたらしい」

「…え？…え？」

石岡は加賀が言っている意味が本当に理解できないようだ。二人と一緒に？二人は、いまここにいるのにな？

「市塚修悟、新澤悠斗、だったな？」

加賀は、大きく深呼吸をすると、あらためて二人の名前を呼んだ。

「…うん」

修悟は不思議そうに頷く。

「本名は？」

「え？」

「…修悟と悠斗、が本名なんだな？」

「うん。もちろん」

悠斗は、何か気がついたらしく、大きく目を見開いた。

「っ！そんな馬鹿な！約束してた奴は、市井と新島じゃ…あつ」

そこまで言って、石岡も何かに気がついて、一気に青くなる。

「え？ナニがどうしたの？」

修悟だけが、まだわからずに首を傾げる。

「…人違い？」

悠斗は、小さく、だがはっきりと言葉に出した。

その言葉に、加賀と石岡はビクッと反応する。

そう、修悟と悠斗は、同じ年頃の二人に間違われたのだ。話の流れから、その二人は今回の内容を承知のうえで来るはずだったのだろう。

だが、実際は、まったく関係ない二人を監禁して性的に暴行したことになるのだ。

「…すまなかった！許してもらえとは思っていないが、どうか、どうかオレだけの責めで許して欲しい！」

加賀は、額をザーメンまみれの床に摩り付けて、土下座した。



「ハイチーズ！」

修悟の掛け声にあわせ、石岡の構えるデジカメのシャッターが切られた。

「若！お似合いですよ！」

「てめえ、あとでぶつ殺すっ！」

「まあまあ、こんなのは序の口だから！」

「はいはい」

悠斗の言葉に、加賀は大げさに肩を落として見せた。

衝撃の真実発覚から四日後、四人は、修悟と悠斗のお気に入り河原に来ていた。

加賀は、全裸にセーラー服の上下という格好をさせられ、さつきから写真を撮られまくっている。

結局、修悟と悠斗は加賀達を許すことにしたのだ。

人違いだったという事がわかった直後は、さすがに言葉が出なかったが、状況から、加賀が嘘をついているとは思えなかったし、本気で謝っていることも良くわかった。

そして、立場や動機はどうであれ、加賀が自分の体を張って二人を守ってくれたのも事実で、どうしても憎めなかったのだ。

また、仮に許さないとしても、自分たちがされた行為を、親やその他の大人に説明するというのは、正直有りえなかった。

ただし、ただ許すのはさすがにしゃくなので、加賀に、『夏休み期間中は絶対服従』という条件を飲ませたのだ。

聞けば、加賀も二人と同様に東京の人間なので、夏休み中にイロイロなことをできるはずだ。

とりあえず、今日は、今年最後になるこの河原での水遊びにつきあってもらって、イロイロな記念写真を撮りまくる予定だ。

「あゝあ。でもこの川とも今年は今日で最後か」

修悟は心底残念そうにぼやく。

「仕方ないよ。むしろ一週間居れたんだから良しとしなきゃ」

結局、あの肉奴隷にされた日の翌日から今日まで、つまり家出した日から今日まで、修悟の祖父母の家に滞在して、恒例の夏休みを満喫できたのだ。

あの日の翌日、疲れ果ててあちこち（主に腰まわりだが）痛い体を押して修悟の祖父母の家に行くと、事態は二人の想像を絶する騒ぎになっていた。

なんと、地元総出で山狩りをしようという状況になっていたのだ。

その出発式の最中に、二人がひよっこり現れたものだから、それはもう大変だった。

それこそ、ありとあらゆる大人にこっぴどく叱られまくった。

だが、一番怒られると思っていた両親は、ただただ大泣きして抱きしめるだけで、何も言わなかった。

二人にとっては、それは怒られるよりも遥かに辛い事だった。

そして、ますます自分たちの経験した事を話すことは出来なくなった。

「なあ、コレ、もういいだろ？ぶつちやけ、浣腸よりも恥ずいぜ」

加賀が、セーラー服のスカートをめくりながら懇願する。

「じゃあ、あと一枚だけね！ほら、おっぱいも出さなきゃ！」

「とんでもねーエロガキだな！」

「そうしたのは誰でしょうね〜！」

「はいはい悪かった！」

イロイロあったけど、今年の夏休みは、きつといつもと違うはず。

そう、三人で、ひと夏を。

おしまい



5180710

5180710

20

あとがき

皆さん暑い中?ご苦労様~イラストを担当した筍屋です
まずは この本をお手にとって頂き 誠にありがとうございましたm(_ _)m

合同本もすでに4冊目(すぐ思い出せないぐらいの数)と言うのに
相変わらずスケジュール管理がグダグダでして
印刷の切りギリギリまで絵を描いてるって事にして
例によって本文読んでません(ハイ(x_x☆)ノキッ
どんな感じの本になっているかは 不明ですが
今回は同時調教モノって事で 従来と多少趣が違う絵も入れておりますので
一枚でも 皆様のお気に入り絵を見いだして頂ければ幸いですm(_ _)m

2007年8月 筍屋

筍屋 takenokoya@yahoo.co.jp
竹藪館 <http://www.ki-ho.ne.jp/su-oh/keikoku.htm>
(御意見 御感想ありましたら宜しくお願いします)

はじめまして&お久しぶりです。へたれ文字書きのた~んけーですm(_ _)m

公式な合同名義としては4冊目の合同本になります(調べました)

ただし、たまたま、た~んけー単独名義でも、実質的には合同本みたいな本ばかりで、
それらを入れると(コピー本を含め)、今回は10冊目になります(〇〇)

そう、記念すべき10冊目!です。

…たった今、発見しましたorz

今回は、同人界(ただし、実質はオフセット本サークル限定?)でイロイロあって、
今この原稿を打っていても、本当に当日本があるのか、いまいち自信がありませんorz

この本が、無事、みなさんのお手に取っていただけているなら、
どこか一場面でも、皆さんの琴線に触れられたら幸いです。

た~んけー
turn_k_vf@yahoo.co.jp

三人で、ひと夏を。

2007年8月19日 初版発行
発行/筍御飯&ふあいふあむ
著者/筍屋&た~んけー
印刷所/株式会社 プロス(本文)
関西美術印刷株式会社(表紙)
連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp



2007summer

筍御飯&ふあいふあむ